

「イクメン」が日本を救う

大熊 由紀子 国際医療福祉大大学院教授



—中村藍撮影

くらしの ●明日

私の社会保障論

「女性が外で働くようになると出生率が下がる」と信じられていた時代がありました。日本より女性の社会進出が進んでいたスウェーデンが88年に旅した時、街に子どもがあふれているように見えました。不思議に思って統計局を訪ねると、合計特殊出生率が80年代半ばから上昇し、1・8になっていました。

人口問題審議会の委員だった私は、ワクワクしてこの「発見」を報告しました。男性委員は冷ややかでした。「あのようなフィンランドな国は参考になりません」

当時、スウェーデンは誤解に満ちた「フリーセックスの国」というレッテルを貼られていました。でもこの報告を機に、米英独仏に北欧を加えた出生率の表が、審議会に出されるようになりました。

05年にノルウェーを訪ねた時は、医療や福祉の取材が終わるやいなや、子育てについて水を向けてみました。男性たちはその楽しさを生き生きと語り始めました。訳が知りたくて、国立男女平等センターを訪ねたら「パッパ・クオーター（割り当て）を4週間から4カ月に延長する」という

業務の効率アップ、自殺率減少も

情報を聞かせてくれました。この国には所得の100%を保障する育児休業が42週間（現在は47週間）あります。うち4カ月は、父親に限り取得を認める、というのが「パッパ・クオーター」。取らなければ「権利を放棄した」とみなされ、父母合わせた育児休業期間が減ってしまうので「そうならないように、パパも育児を」と奨励するために取られた、思い切った政策でした。育児取得率は9割です。

日本も、男性の育児取得率を17年に10%とする目標を掲げていますが、遠く及びません。そこで厚生労働省は10年6月「イクメンプロジェクト」を始めました。「子育てを楽

しみ、自身も成長する男性」を表す「イクメン」は、この年の新語・流行語大賞に選ばれました。

この言葉を広めた東レ経営研究所部長の渥美由喜さんを、大学院の公開講義「発信力を磨く」にお招きしました。渥美さん自身も育児休業の体験者。「イクメンを結婚相手を選ぶ女性は、イクメンを選ぶ女性の4倍」など、男心をくすぐるユニークな調査研究をして発信しています。

イクメンは早く帰宅するため、業務効率は格段に向上する▽言葉が通じない赤ん坊や地域のさまざまな人とやりとりする中でコミュニケーション能力が培われる▽北欧ではイクメンが増えたことで中高年男性の自殺率が減り、経営陣の育児取得率は平社員より高い――。先入観を覆す話の連射に、聴講生は魅入られたようでした。

職業人・家庭人・地域人の1人3役をこなせるイクメンは、人口減少と高齢化が進む日本を救うキーワードになるような気がしてきました。



イクメンと子どもの数

日本の低出生率は、父親の育児参加の少なさも要因の一つと指摘されている。内閣府などによると、6歳未満の子どもがいる日本人男性の育児時間は約30分で、欧米の男性の半分だ。厚生労働省の09年の調査では、夫の休日の家事・育児時間が長い家庭ほど、第2子以降誕生の割合が高くなる傾向が出ている。

「くらしの明日」は毎週金曜日掲載。次回は湯浅誠さんです